

Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **56**, 127-131 (2008)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて —障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには—

保井俊英*, 永田隆子*, 濱屋桃子*, 三上真二**
*(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)
**(大阪市長居障害者スポーツセンター)

About the consciousness level to “Sports for the disabled” — To tie to the qualification acquisition as a “Sports Trainer of Disabled: Intermediate Sports Trainer” —

Toshihide Yasui, Ryuko Nagata, Momoko Hamaya, Shinji Mikami

* *Department of, Health and Sports, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya, 663-8558, Japan*
** *Osaka City Nagai Sports Center for Persons with Disabilities,
* Osaka, 546-0034 Japan*

Abstract

To tie to the “Sports Trainer of Disabled: Intermediate Sports Trainer” qualification acquisition, we investigated the consciousness level to “Sports for the disabled”. The object people were 167 new students.

- 1) Interested student in “Sports for the disabled” was 53.3%. The will to acquire a “Sports Trainer of Disabled: Intermediate Sports Trainer” qualification is strong because of strength of the interest. However, the student doesn't understand the method of acquiring a “Sports Trainer of Disabled: Intermediate Sports Trainer” qualification.
- 2) The student who had answered, “In my environment, there is disabled persons” was 27.5%. Moreover, the student who had answered, “There is an experience of participating in the exchange with the handicapped person” was 33.5%. In addition, the student who had answered, “The television program and the newspaper article, etc. concerning sports for the disabled were seen” was 92.2%.
- 3) The student answered “Sports for the disabled” item that he knew. In the result of the answer, basketball was 46.1%, the wheelchair basketball was 44.9%, swimming were 25.1%, track and field sports were 22.2%, and volleyball was from the high ranks to 9.6%.
- 4) It is important to give motivation to “Sports for the disabled” for an interesting student. Moreover, dissemination to sports for the disabled and appropriate guidance is regularly necessary.

1. はじめに

本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員(以下中級スポーツ指導員とする)の資格取得は、2000(平成12)年度より実施されている。その経緯、実情等については、「本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者資格取得制度と課題について」¹⁾「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について」²⁾「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について(2)」³⁾「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格申請について—3年間の指導実績—」⁴⁾「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格取得者のための指導経験について」⁵⁾『障害者スポーツ指導

者制度中級スポーツ指導員」資格取得者の意識と指導実績について』⁶⁾と過去6年間6題にわたり報告してきた。

2008(平成20)年度新入生より、従来実施されていた大学健康・スポーツ科学科(健康運動科学コース、競技スポーツコース)と短大健康・スポーツ学科(健康教育コース、生涯スポーツコース)ともに、コース制度を廃止した。その結果、今までコースの枠によって、制限されていた資格が、数多く取得できるようになった。資格は、在学中に所定の単位等を取得しそれぞれの授与機関に申請することによって取れる資格、在学中に所定の単位等を取得し資格試験を受験・合格することによって取れる資格、在学中に所定の単位を取得しその後卒業後さらに所定の単位・試験等を受験・合格することによって取れる資格、また資格更新制度のある資格など、様々である。

我々が経年的に研究を進めている「中級スポーツ指導員資格」取得者は、大学健康・スポーツ科学科が対象で、2004(平成16)年度24名、2005(平成17)年度20名、2006(平成18)年度35名、そして2007(平成19)年度20名という実績を残している。2006(平成18)年度が35名と多いのは、第6回全国障害者スポーツ大会(のじぎく兵庫大会)が兵庫県で開催され、その指導補助として参加した学生が多かったことが大きな要因として考えられる。それを除けば、毎年20名程度の中級スポーツ指導員を養成していることになる。

「中級スポーツ指導員資格」取得は、所定の単位取得と「卒業までに3年間にわたって、120時間(15日)以上の指導経験を積んだ者」(以下指導経験とする)とが資格申請の条件となっている。所定の単位取得は、学内の授業であるため比較的容易と考えられるが、指導経験は学外に自らが指導現場を求め行動することから比較的難しい状況である。指導経験について、毎年何人かの学生は、資格申請直前の駆け込み型となったケース⁶⁾もあり、また場合によっては資格申請を断念していく結果に終わったケースもある。この状況を打開させるために、取得希望学生には早い指導経験の開始とそして計画性を持たせることが大切となる⁶⁾。

指導経験における日数のカウントは、大学2年次から始まる。そのため、1年次における資格取得意識を上げておく必要がある。まず、「障害者スポーツ」に対する意識レベルを把握し、それに対して適切なアドバイスを送り続ける必要があると考えられる。そこで、我々は、大学健康・スポーツ科学科2008(平成20)年度入学生に対して、「障害者スポーツ指導者資格についてのアンケート」を実施し、その現状について検討し、今後の指導に生かすことを目的に研究に取り組んだ。

2. 方法

2008(平成20)年度大学・健康スポーツ科学科入学生に対して、11項目についてアンケート調査を行った。調査期間は7月中旬で、学科専門科目選択必修「バレーボール」の授業終了後対象者に依頼し、出席者167名全員より回答があり、その結果を集計した。

3. 結果および考察

(1) 障害者スポーツ指導員資格取得の希望について

障害者スポーツ指導員資格の取得を、①強く希望している32名(19.2%)、②希望している102名(61.1%)、③希望しない9名(5.4%)、④わからない24名(14.4%)であった。また、中級スポーツ指導員資格の取得を、①強く希望している9名(5.4%)、②希望している99名(59.3%)、③希望しない19名(11.4%)、④わからない40名(24.0%)であった。

障害者スポーツ指導員資格取得を強くあるいは希望している学生が、約8割、中級スポーツ指導員資格を強くあるいは希望している学生が、約6割いることになる。

(2) 障害者スポーツへの興味について

障害者スポーツについて、①非常に興味がある16名(9.6%)、②興味がある73名(43.7%)、③ふつう

Table 1. 中級スポーツ指導員資格の取得希望と障害者スポーツに対する興味の関係

		中級スポーツ指導員資格取得を				計
		①強く希望している	②希望している	③希望しない	④わからない	
障害者スポーツに対して	①非常に興味がある	5	9	1	1	16
	②興味がある	2	52	7	12	73
	③ふつう	1	28	4	19	52
	④あまり興味がない	1	9	6	6	22
	⑤全く興味がない	0	0	1	1	2
	無回答	0	0	0	2	2
計		9	98	19	41	167

n = 167

52名(31.1%), ④あまり興味がない22名(13.2%), ⑤全く興味がない2名(1.2%), ⑥無回答2名(1.2%)であった。

Table 1に、中級スポーツ指導員資格の取得希望と障害者スポーツへの興味の関係を示した。中級スポーツ指導員資格の取得希望と障害者スポーツへの興味は、独立性の検定($p < 0.01$)により関係があった。したがって、「非常に興味がある」「興味がある」学生(89名, 53.2%)が、中級スポーツ指導員資格の取得をめざすであろうと考えられる。

(3) 1年次前期全学共通教育科目障害者スポーツ関連授業の受講について

障害者スポーツ関連の授業として、また中級スポーツ指導員資格のための基幹科目として、学科専門科目に、3年次後期「障害者スポーツ論Ⅰ」、4年次前期「障害者スポーツ論Ⅱ」、4年次後期「障害者スポーツ指導法」が設定されている[2008(平成20)年度改定]。一方、全学共通教育科目では、前後期とも、「遊びと障害」、「障害者とスポーツ」が開講されているが、これらは中級スポーツ指導員資格とはなんら関係ない科目である。そこで、この全学共通教育科目「遊びと障害」「障害者とスポーツ」における1年次前期の履修状況を尋ね、実際の興味度をみることにした。

「遊びと障害」は、①履修した5名(3.0%), ②履修しなかった159名(95.2%), ③履修希望を出したが抽選で外れた3名(1.8%)であった。また、「障害者とスポーツ」は、①履修した15名(9.0%), ②履修しなかった145名(86.8%), ③履修希望を出したが抽選で外れた7名(4.2%)であった。両科目に対して重複の履修希望を出した学生はなく、まとめると30名(18.0%)が障害者スポーツの科目履修を考え、そして興味があったのであろう。

(4) 3年次後期開講「障害者スポーツ論Ⅰ」の履修について

3年次後期開講「障害者スポーツ論Ⅰ」を、①履修する15名(9.0%), ②履修しようと思う61名(36.5%), ③履修しない19名(11.4%), ④わからない72名(43.1%)であった。障害者スポーツ指導員の資格を取得するために、この「障害者スポーツ論Ⅰ」は必要な科目であることは、入学時のオリエンテーションで伝えてあるが、このアンケート実施時には、あえて必要な科目ということを特に再確認せずに実施した結果である。言い換えると、資格を取得したいと考えているにも関わらず、何をどのようにしたらいいのかということが、うまく伝わっていない現状を表しているとも考えられる。約6割～8割の学生が資格取得を考えているのに、この「障害者スポーツ論Ⅰ」を履修するまたは履修しようと思うが約5割に満たない現状である。資格担当者としては、はやくガイダンスを開き、再度詳しい説明をする必要があると考えられる。

(5) その他の質問について

自分の身近なところに障害者が、①いる46名(27.5%), ②いない120名(71.9%), ③無回答1名(0.6%)であった。また、障害者と交流するボランティアに参加したことが、①ある56名(33.5%), ②ない110名(65.9%), ③無回答1名(0.6%)であった。さらに、障害者スポーツに関するテレビ番組・新聞記事等を、①よく見る20名(12.0%), ②たまに見る134名(80.2%), ③全く見ない11名(6.6%), ④無回答2名(1.2%)であった。これらの結果より、障害者と直接接した経験のある学生は全体の約3分の1、テレ

Table 2. 障害者スポーツで知っている種目(最高3種目まで複数回答可)

種目	人数	%	種目	人数	%	種目	人数	%
バスケットボール	77	46.1%	車椅子マラソン	5	3.0%	電動車椅子サッカー	1	0.6%
車椅子バスケットボール	75	44.9%	マラソン	4	2.4%	チェアスキー	1	0.6%
水泳	42	25.1%	ブラインドサッカー	4	2.4%	スケート	1	0.6%
陸上競技	37	22.2%	ハンドボール	4	2.4%	アイスホッケー	1	0.6%
バレーボール	16	9.6%	卓球	4	2.4%	視覚障害ソフトボール	1	0.6%
トライアスロン	12	7.2%	ボッチャ	4	2.4%	バドミントン	1	0.6%
車椅子テニス	10	6.0%	野球	3	1.5%	ボウリング	1	0.6%
テニス	9	5.4%	車椅子ハンドボール	2	1.2%	剣道	1	0.6%
シッティングバレーボール	8	4.8%	サウンドテーブルテニス	2	1.2%	ダンス	1	0.6%
サッカー	7	4.2%	車椅子バレーボール	2	1.2%	n = 167		
スキー	7	4.2%	アーチェリー	2	1.2%			

ビ・新聞等で障害者スポーツを見た経験がある学生は、ほとんど(154名, 92.2%)ということがいえる。

そこで、障害者としての知識として、障害者の種類を尋ねた。障害者の種類で聞いたことのあるものは、①身体障害者 162名(97.0%)、②知的障害者 158名(94.6%)、③精神障害者 82名(49.1%)、④視覚障害者 152名(91.0%)、⑤聴覚障害者 148名(88.6%)、⑥内部障害者 9名(5.4%)、⑦その他 0名であった。認知度の高いのは、身体障害者、知的障害者、視覚障害者、聴覚障害者で、認知度の低いのは精神障害者、内部障害者ということができる。

最後に、障害者スポーツで自分が知っている種目を最大3つあげさせた。この結果を Table 2 に示した。上位そして10名を超えている種目は、バスケットボール 77名(46.1%)、車椅子バスケットボール 75名(44.9%)、水泳 42名(25.1%)、陸上 37名(22.2%)、バレーボール 16名(9.6%)、トライアスロン 12名(7.2%)、車椅子テニス 10名(6.0%)であった。これらの回答は、自由回答としたため、同じような種目が存在するが特にまとめず、そのままの列挙とした。また、回答数でみると、3種目回答が 71名(42.5%)、2種目回答が 46名(27.5%)、1種目回答が 38名(22.8%)、無回答が 12名(7.2%)であった。具体的な種目があまりあげられない学生がいることも事実である。メディアへの露出度と関係があると考えられる。

(6) 今後の課題について

この研究を始めた当初の課題として、「中級スポーツ指導員資格取得者が減少すれば、本学健康・スポーツ科学科において、取得資格縮小場合には、その対象となる可能性があるのではないか」という危機感から取り組んだ経緯がある。また、取得者が特別な状況を除き 20名程度となりつつある現状からも、激増は非常に厳しいものがある。平成 20 (2008)年度の健康運動科学コースと競技スポーツコースのコース制度廃止により、中級スポーツ指導員への門戸は広がった(過去は健康運動科学コースのみでの中級スポーツ指導員資格取得)といえども、それに比例して必ずしも増加するとは考えられない。

今回の調査によると、1年次前期の時点で障害者スポーツについて「非常に興味がある」16名を中心に「興味がある」73名を加えた学生に対して、モチベーションをあげ、中級スポーツ指導員資格取得にどうチャレンジさせるかが大きな課題と考えられる。

2年次後期に開講されていた「障害者スポーツ論Ⅰ」が、3年次後期開講となり、その場でたとえ資格取得を意識しても、中級スポーツ指導員資格の取得条件である「卒業までに3年間にわたって、120時間(15日)以上の指導経験を積んだ者」という指導経験の達成が、過去の年度以上に難しくなる。そのためにも、定期的に障害者スポーツに関する情報提供とモチベーションの向上を狙ったガイダンス等が必要となるであろう。

4. まとめ

過去 6 年間 6 題にわたって障害者スポーツ指導者資格について報告してきた。特に中級スポーツ指導員の資格取得には、「講座の単位取得」と「卒業までに 3 年間にわたって、120 時間(15 日)以上の指導経験を積む」ことが要求される。指導経験について、毎年何人かの学生は、資格申請直前の駆け込み型となったケース⁶⁾もあり、また場合によっては資格申請を断念していく結果に終わったケースもある。この状況を打開させるために、取得希望学生には早い指導経験の開始とそして計画性を持たせることが大切となる⁶⁾。そこで、今回は、新入生の「障害者スポーツ」に対する意識レベルを把握し、それに対して適切なアドバイスを送り続ける必要があると考え、「障害者スポーツ指導者資格についてのアンケート」を実施し、その現状について検討し、今後の指導に生かすことを目的に研究に取り組んだ。調査対象者数は 167 名であった。

- 1) 中級スポーツ指導員資格取得を「強く希望する」9 名(5.4%)、「希望する」99 名(59.3%)であった。障害者スポーツについて「非常に興味がある」16 名(9.6%)、「興味がある」73 名(43.7%)であった。興味ある学生が、中級スポーツ指導員資格の取得を考えている($p<0.01$)。
- 2) 1 年前期の全学共通教育科目「遊びと障害」および「障害者とスポーツ」を履修した学生は 5 名(3.0%)、15 名(9.0%)で、履修希望を出したが抽選で外れた学生は 3 名(1.8%)、7 名(4.2%)であった。両科目を重複して履修希望した学生はなく、まとめると 30 名が興味を示し、履修しようとしたと考えられる。
- 3) 中級スポーツ指導員資格の基幹科目である 3 年次後期開講「障害者スポーツ論 I」の履修については、「履修する」15 名(9.0%)、「履修しようと思う」61 名(36.5%)であった。取得を意識している割に、この科目の履修希望が少ないのは、この科目の必要性を知らないと考えられる。
- 4) 身近なところに障害者がいる学生は 46 名(27.5%)、障害者と交流するボランティアに参加した学生は 56 名(33.5%)、障害者スポーツに関するテレビ番組・新聞記事等をよく見る学生は 20 名(12.0%)、たまに見る学生は 134 名(80.2%)であった。学生 3 分の 1 が、実際障害者と接しており、またほとんどの学生が障害者スポーツの情報は得ていると考えられる。
- 5) 学生が知っている障害者スポーツの種目は、主にバスケットボール 77 名(46.1%)、車椅子バスケットボール 75 名(44.9%)、水泳 42 名(25.1%)、陸上 37 名(22.2%)、であった。これもメディアへの露出度の影響であると考えられる。
- 6) 中級スポーツ指導員資格取得につなげることを考えた場合、定期的な障害者スポーツに関する情報提供とモチベーション向上を目的としたガイダンス等が不可欠である。

5. 参考文献

- 1) 永田隆子, 保井俊英, 田中美紀, 藤原進一郎, 「本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者資格取得制度と課題について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 50. 45-54 (2002)。
- 2) 保井俊英, 永田隆子, 田中美紀, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 51. 49-55 (2003)。
- 3) 保井俊英, 永田隆子, 田中美紀, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について(2)」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 52. 75-83 (2004)。
- 4) 保井俊英, 永田隆子, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格申請について－3 年間の指導実績－」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 53. 51-58 (2005)。
- 5) 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格取得者のための指導経験について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 54. 21-28 (2006)。
- 6) 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員」資格取得者の意識と指導実績について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 55. 107-113 (2007)。